

遺跡の生命力

大村浩司

本誌第 35 号の巻頭における「もう一度原点に戻って」で近藤英夫先生が、茅ヶ崎市下町屋に所在する国指定史跡「旧相模川橋脚」の保存整備を通じて、遺跡保存の重要性や行政への期待などを述べられている。筆者もまったく同感である。史跡の保存整備は平成 20 年 3 月に完成し一般に公開されているが、保存整備にかかわった一人として強く感じたことは、本遺跡が大いなる生命力を持っているということであった。

第一は地震で出現したことである。鎌倉時代に橋としての本来の役目を果たした後に埋もれて遺跡となったのであるが、その存在は人々には知られずにいた。約 800 年後に地震という自然現象によって人々の前に姿を現したのであるが、存在そのものもわからなかった遺跡が地震により奇跡的に息を吹き返したのである。

第二に、沼田頼輔博士をはじめとする当時の人々の努力で保存されたことである。沼田は、その考証した論文の中で保存について以下のように述べている「一日も早く当局のこれを実検せられて適当の処置を執り、保存の道を講ぜられんことを切望せざるを得ないのである。」。また、震災後の混乱の中で、幸いにも国の指定を受けて今日まで保存されている。多くの遺跡が消滅してしまう中で保存されたことはすばらしい。さらに、指定後すぐに観光図に描かれていることや相模川名所番付表に掲載されるなど約 80 年前にすでに普及・公開が図られていることも注目される。

第三に指定から約 40 年後には一企業の全面的

な努力で周辺が整備されたこと。指定後は初期保存池が整備されるとともに、地元での保護が継続されてきたが、周辺環境が変化する中、本遺跡の保護に理解を示す企業が私財で整備を行ったことも珍しい。

そして、指定から約 80 年経った今回、保存整備が行われたこと。一部に傷みが観察されたことを受けて保存整備が行われたが、同時に行われた確認調査で新たな遺跡の様子が明らかになり、追加指定を受けるとともに後世に継承されることになったことである。

こうしたことは、本遺跡が持ち続けた生命力がその時々に関わった人々に働きかけた結果かもしれない。

ところで、遺跡の生命力というのは何も本遺跡だけが持っているものではなく、実はどの遺跡も等しく持っているものと思われる。それは、少なくとも今日まで残っている遺跡は、個々の生命力で生き続けているということに他ならないからである。しかもその生命力に守られ、多くのメッセージを持っているのである。そして、生命力を継承できるかどうかは、そのメッセージを受けとった人々がどのように対応するかに関わってくると思われる。ややもすれば、記録保存の発掘調査で消滅していくことが当たり前のように慣らされている現在、私達はどれだけの遺跡を生かし続け、後世に継承できるのだろうか。これは、生き続ける旧相模川橋脚が私達に投げかけたメッセージのひとつだったのかもしれない。

鉄鍋の話あれこれ

若林勝司

遺跡の調査をしていると様々なモノが出てきます。ここでは私の現在調査している真田・北金目遺跡群から出土した鉄鍋とこの遺物にまつわる話をしたいと思います。というのは、これからお話しする遺物が非常に珍しい遺物であることからみなさんにぜひ紹介しておきたいこと、この遺物に関する顛末のなかに考古学的な遺物に関する本質的な問題を含んでいると考えるからなのです。

まず、真田・北金目遺跡群から簡単に紹介しましょう。私の調査している真田・北金目遺跡群は神奈川県平塚市の北西端、秦野市との境界に近い真田・北金目地区に所在します。遺跡群は秦野市方向から東に張り出した北金目台地の西端付近に位置し、金目川と大根川に挟まれた半島状の地形をなしています。この地区には平塚市の遺跡分布地図で9遺跡が確認されています。遺跡名では寺尾遺跡、真田城跡、北金目塚越遺跡などですが、調査の便宜上、真田・北金目遺跡群と呼んでいます。台地の南西端は一段高く、独立丘状の地形をなしていますがここには東海大学校地内遺跡として知られる王子ノ台遺跡が所在します。

この真田・北金目遺跡群は都市再生機構による区画整理のため1995年から調査が開始され、2006年現在で約1,9000㎡の調査が行われており、現在も調査中です。時代的には旧石器時代から中・近世までの様々な遺構・遺物が多数検出され、順次報告書も刊行してきています。

今回ここでお話しするのはこの遺跡群から出土した鉄鍋の話です。この鍋は私たちが18区（遺跡地図では大久保遺跡）と呼んでいる調査区の堅穴住居跡から出土したものです。

出土した住居跡はSI003と呼んでいるもので、土師器、須恵器、甲斐型土器、灰釉陶器などを出土し、10世紀前葉から中葉頃の平安時代所産と考えられているものです。特殊な遺物としては「長年大宝」（初鋳年848年）が1枚出土しています。

出土した鉄鍋は鋳造で、径20.5×深さ7.1mを測ります。厚さは0.5～0.6cmと厚く、体部に対して底部が

若干薄いようですが、横幅4.3×縦幅3.2×長さ6.0cmの長方形の柄が付きます。柄の内部は空洞で、身と柄は一体で鋳造されています。破損しますが片口が1カ所作り出されています。口唇部は短く外反する特徴がみられ、端部は水平面をなしています。図示しましたが、現代でも見る鍋のように柄の部分に木製の柄を挿して使用するものです（図1・2）。

この遺構を調査したのは当時調査会にいた中嶋さんです。出土当時、「こんなものが出たけど何ですか」と中嶋さんは遺物を持ってきました。私は見て「なんだか古そうにも見えるけど、把手が妙に四角くて妙に現代的だな」と思いました。そして「なんか江戸時代ぐらいの肥柄杓かなんかじゃないの」と答えました。彼女は「でもまわりの土は新しいものが混じってないですよ」とのことでした。「確かに鋳造で、作りが厚くて変だな・・・」と思いましたが、この時は曖昧になったと思います。この住居跡は『真田・北金目遺跡群発掘調査報告書5』（2006年刊）で既に報告しましたが、この鉄鍋は掲載しませんでした。その評価ができなかったからです。

この鍋はその後何となく気になっていたのですが、ある時、秋田県の秋田城跡の本を見ていて、同じような鍋があることに気が付きました。掲載された図は小さいものですが、よくよく見ると似ています。そこで、私も所

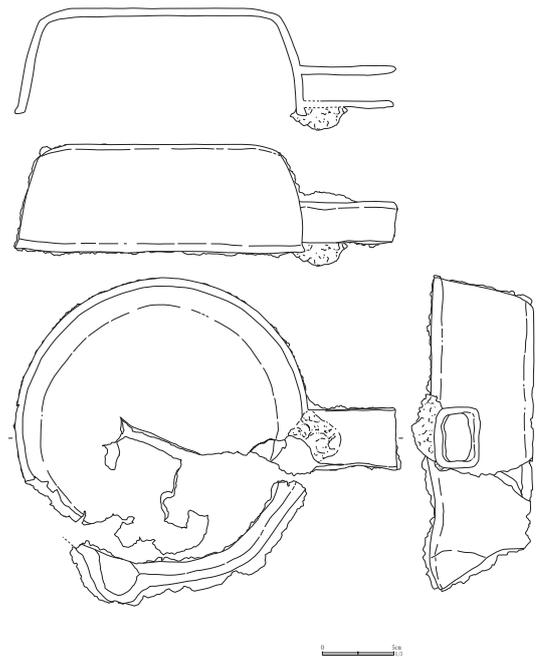


図1 18区出土の鉄鍋実測図



図2 鉄鍋写真

属している相模の古代を考える会で会員のみなさんに鍋の実測図を渡し、「どこかで知っていたら教えてください」と情報を募りました。しばらくして、藤沢市教育委員会の荒井さんから資料を送っていただきました。福島県文化財センターの研究紀要と東北歴史資料館の特別展解説『古代の旅』でした。福島県文化財センターの研究紀要は平安時代の鑄鉄製品についての鑄型からの復元研究についての論文でしたが、秋田城跡の出土例と宮城県の高賀城跡からの出土例が記載されていました。特別展解説『古代の旅』のほうは、古代の軍団（古代、律令制に伴って諸国に設置された軍隊）の装備品の復元模型のなかに同じ鍋が2点提示されていました。

そこで掲載図面から寸法と特徴を調べてみると(図3)、高賀城の例は径29.5×深さ9.0cm程で1カ所に片口と断面長方形の柄が付きます。柄は長さは不明ですが、横幅5.5×縦幅4.4cm程を測ります。口唇部は直線的に立ち上がり、端部は水平です。厚さは底部が厚く1.5cm、体部で1.0cm程あるようです。秋田城の例は径20.3×深さ7.0cm程を測り、横幅4.2×縦幅2.8×長さ5.2cm程の柄が付きます。片口はなく、口唇部は直線的に立ち上がり端部は丸い形をなします。厚さは体部が0.5cm、底部が厚く1.0cm程あるようです。

出土した鉄鍋をこれらと比較すると、高賀城の例は本例よりも若干大きいようで、口唇部が直線的ですが、端部は水平である点は類似します。秋田城の例は大きさがほぼ等しいのですが、片口がなく、口唇部が直線的で丸く収まり、底部が厚くなっています。このように、類例は今のところ2例のみですが、比較すると、それぞ

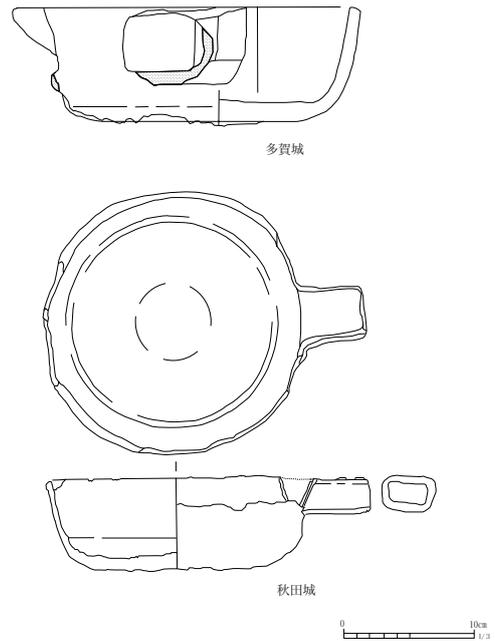


図3 高賀城・秋田城跡出土の鉄鍋(吉田2005を改変)

れ形態等に特徴があり同じ鑄型の鑄造品ではありませんが、ほぼ同一容量の容器のものです。

古代の基本法典である養老令のなかの軍隊に関する取り決め「軍防令」によると、成人男子3人に1人は1年間軍団に属し、兵役に服さねばなりません。軍団は兵士50人毎に「隊」、10人毎に「火」というふう組織され、組織毎に原則自前で弓矢、太刀、食料などの装備品用意しなければなりません。「火」の装備品に鍋2個があり、東北歴史博物館開催の展示『古代の旅』では柄と片口の付く鍋を「火」の装備品として復元しているのです。高賀城、秋田城からの出土品はこれら軍団兵士に関わるものと推定されているのですが、本遺跡群からの出土は何を意味するのでしょうか。

遺跡から出土する鉄製品は、古代のものにしても非常に少ないものです。鉄製品がもともと貴重品であったことあるのでしょうか、鉄は後で鑄直したりして別のものに再利用されたことが多かったのでしょうか。こうしたことから本例は幸運にも遺跡に残ったものとも考えられるのですが、すくなくとも現状では出土例が少ないのです。古代相模国には大住郡(現在の平塚・伊勢原市周辺)と余綾郡(現在の秦野市、大磯町周辺)に「大住団」、「余綾団」の軍団があったことが正倉院文書に知られています。では、出土した鍋が軍団に係わるもので、出土した所に軍団があったのでしょうか。これも単純には言い切

第31回 神奈川遺跡調査・研究発表会報告

れません。というよりかなり難しいようです。古代史の研究者に聞いたところでは、軍団は役所であり、国府の近くにあるのでは、とのことでした。鍋の出土した周辺では比較的鍛冶に係わる遺構・遺物の出土が目立ちます。鉄製品を製造する工房があったことも考えられます。

これまで見てきたように、出土した鉄鍋についてはまだまだ謎が多いのです。全国的にもっと調べてみる必要がありそうです。破片だけで出てきた場合、鍋かどうかも分からないことが多いと思います。また、私のように、新しいものと判断されているものもあるかもしれません。

最初に「考古学的な遺物の本質」と大げさに書きましたが、考古学的な遺物、遺構もそうですが、珍しいものになるとなかなかその実体が分からず、その解釈に非常に苦しむことが多いのです。例えば古代の銭に「富本銭」というのがありますが、最近までまじないの銭とか言われてきました。しかし、近年、奈良県明日香村の飛鳥池遺跡の調査で大量に見つかり、7世紀後半に我が国で初めて鑄造された銭だということがはっきりしたのです。

こうした珍しい遺物を理解し、適切な評価をするためには考古学に携わるもの日々の研鑽が必要です。また、先述したような裏話は、よく秘話のようなかたちで伝承されていくことが多く、分からなかった本人にとっては汗顔に耐えないのですが、ここでは遺物顛末の一端として、また、一つの教訓としてみなさんに提示させていただきました。「考古かながわ」が遺物や遺構の紹介に留まらず、こうした裏話、よもやま話も記載していける、ある意味で自由な機関誌であることを期待していきたいと思えます。

最後に、この鉄鍋については、平成19年度刊行の『真田・北金目遺跡群発掘調査報告書6』に補遺のかたちで掲載しました。報告書には出土位置を明確に提示できなかったのですが、先日、住居北東コーナー付近近出土ということがはっきりしたので今後の報告のなかで再度出土状態を報告していきたいと思っています。

引用・参考文献

吉田秀亨 2005「平安時代の鑄鉄製品―出土鑄型からの復元研究―」『福島県文化財センター研究紀要2005』東北歴史博物館 2005『古代の旅』東北歴史博物館
若林勝司・川端清倫ほか 2008『真田・北金目遺跡群発掘調査報告書6』平塚市真田・北金目遺跡調査会

去る平成20年1月20日(日)横浜市歴史博物館講堂に於いて、神奈川県教育委員会と横浜市教育委員会の後援のもと、第31回神奈川遺跡調査・研究発表会報告を開催いたしました。真冬の寒さの上、夕方より雪との予報の中ではありませんでしたが、約160名もの参加者(主催者調べ)に足を運んでいただきました。

当日の進行は、冒頭の中村若枝副会長による開会挨拶の後、口頭発表10遺跡、誌上発表3遺跡、計13遺跡の発表を行い、岡本孝之会長の閉会挨拶というものでした。また、7団体が参加して別室で図書交換会を行いました。

当日の発表内容は、午前中の発表では、慶應義塾大学の安藤広道さんに「横浜市 観音松古墳」の発掘調査とその成果、さらに古墳の規模・形態などについての新たな考え方を紹介していただきました。

葉山町教育委員会の山口正憲さんには、逗子市と葉山町にまたがる国指定史跡「長柄桜山古墳」の史跡整備に伴う発掘調査とその成果、また今後の研究課題などを報告していただきました。

横須賀市自然・人文博物館の稲村繁さんには、「横須賀市 大津古墳群」の市史編纂事業に伴う発掘調査で発見された横穴式石室をもつ帆立貝形古墳などについて報告していただきました。

続いて、伊勢原市教育委員会の立花実さんには、「伊勢原市 日向・洗水遺跡」で新たに発見された古墳の発掘調査について報告していただき、今後さらなる未確認古墳が発見され、さらに地域の歴史が解明される可能性について発表していただきました。

午後の発表では、(財)かながわ考古学財団の畠中俊明さんが、相模原市津久井町の「津久井城跡」における旧石器時代調査を報告していただき、石器ブロックが環状に並ぶ状況とその解説をしていただきました。

山武考古学研究所の近江屋成陽さんには、「秦野市 太岳院遺跡」における発掘成果のうち、多数発見された縄文時代晩期の配石墓や配石遺構について報告していただきました。

(財)かながわ考古学財団の宮井香さんには、「海



会場風景

老名市 河原口坊中遺跡」の発掘調査とその成果について報告していただき、弥生時代後期の竪穴住居跡や方形周溝墓のほか、県内では3例目の出土となった小銅鐸などについて発表していただきました。

20分の休憩をはさみ、盤古堂考古学研究所の浅賀貴広さんが「小田原市 愛宕山遺跡第Ⅱ地点」の発掘調査成果について報告していただき、古代の大形掘立柱建物跡などについて発表していただきました。

斉藤建設の菊川英政さんには、「鎌倉市 今小路西遺跡」の発掘調査成果から、中世の武家屋敷や古代の遺構について報告していただきました。

玉川文化財研究所の小山裕之さんには、「小田原市 大久保弥六郎邸跡」の発掘調査で確認された戦国時代の舗装された道路跡や近世の屋敷跡について報告していただきました。

このほか誌上発表としては、西相文化財研究所の林原利明さんに「厚木市 小野公所遺跡第3地点－玉川上流域における後期古墳関連遺構の調査－」と題して報告していただきました。吾妻考古学研究所の小林克利さんには、「寒川町 岡田西河内遺跡－岡田古墳群の調査－」と題して、古墳の発掘調査成果を報告していただきました。横浜市ふるさと歴史財団の鈴木重信さんには、近代遺跡である「横浜市（仮称）元町水屋敷遺跡」の発掘調査について報告していただきました。

今回の遺跡調査・研究発表会は、小特集として神奈川の古墳をテーマに午前中の発表を行い、午後からは通常どおり各時代の遺跡発表を行いました。今回は古墳小特集ということで、その他の時代の遺跡発表が例年

より少なくなってしまう、貴重な調査成果を報告していただけなかった遺跡もありましたが、今後は調査年次に係らず貴重な成果や重要な遺跡については取り上げていく予定ですので、次回以降御協力をお願いしたいと思います。

県内では、県考古学会主催の遺跡調査・研究発表会をはじめ、各地で遺跡発表会が多く開催されるなど、年々埋蔵文化財を一般市民の方々に知っていただく機会が増えてきています。また、

各地で実施されている発掘調査において遺跡見学会を開くケースが増えるなど、遺跡や埋蔵文化財に対する理解も進みつつあります。今後、市民がさらに埋蔵文化財への理解を深め、広く埋蔵文化財を活用できる場をもっと提供していけるよう、神奈川県考古学会が中心となって活動していきたいと考えております。

栗田一生（発表会担当役員）

2007年度 考古学講座

『新神奈川・新弥生論』参加記・讃歌記

伊丹 徹

①岡本趣旨説明、②谷口・③河合・④中村・⑤杉山・⑥浜田・⑦立花・⑧中川・⑨安藤報告の9本、それぞれ一時間程の内容を強引に30分に圧縮して発表する方も、それを倍に復元しながら聞く方にとっても、お互いかなりしんどい一日となった。終わってからしばらく興奮状態が治まらず、快い疲労感が残った（宿酔は別の話）。

大森貝塚の調査から121年となる。弥生式土器という呼称は19世紀末からあったものの、石器時代と古墳文化しかない時代設定の間に「中間時代」「金石併用時代」を割り込ませるには、数々の発見と多くの先学の尽力があった。しかし「弥生（式）時代〔文化〕」が一般にも認知されるようになってまだ半世紀余り。しかし今その弥生の存立基盤が大きく揺れている。弥生時代の指標として幾つかの文化要素が挙げられたが、その両横綱は稲と鉄だった。2003年、AMS法による14C年代測定の較

正年代が公表され、従来考えられていた年代との隔たりの大きさに一時は騒然となった。それを契機に実年代の指標とされた資料の再検証が進み、前期の鉄器の存在は怪しくなった。また、稲も縄紋前期とはいかないまでも後期の例が増えた。生業の中心となりうる規模の水田の時期は早期などに一般化するのか疑問は多い。だが、およそ2000年前、現在は神奈川県と呼ばれる地域において、どのような原因で何が起きたのかということを実験的に考究する報告会が催された意義は次元の違う問題である。

各報告の主張には相容れないものもある。研究会は仲良しクラブではないのだから、他者を尊重しつつも研究を志す者の数だけ説があって当然である。淘汰されたり、反論なく風雪に耐えた仮説が定説と化し、一般向けの通史や教科書に採用される。今回の発表の中には、普遍的な部分を抽出すれば定説となるものもありうる。多様性というか、幅をもった言説が飛び交うことこそ健全な姿である。参加者はお客さんではない。有難い話を聞いたのではなく、自分でも考える機会を持つことができた受け止めてこそ参加したといえよう。

今回の趣旨や報告者の紹介は①でなされている。また、各報告は発表の時間不足を補うため丁寧に書かれているので、聞き逃したこともチェックできるようになっている。詳細は冊子を参照されたく、ここでは思い付きの羅列に終始することを許されたい。①会長は独自路線を歩むことで知られている。全国を隈なく回り、万卷の書を翻いて導き出された結論なのだろうが、その思考過程は凡人には理解できない。従って一般の方々の前では持論でないことを語ってもらうようお願いしたこともある。今回はご自身のプロデュースであり、誰も止めることはできない。そのせいかとでも楽しそうに、鞆を買くらいにこにこして趣旨説明をされた。特徴的な遺構・遺物の分布を幾つも重ねることにより東日本の中にも深い溝が

あることを事例として示した。これは対立の反映であろうが、それをいきなり戦争に飛躍させてよいものかと思う。おそらくそのような反論に答は用意されていることだろう。②はまだ不明の多い中里（中期中葉）以前を対象とし、縄紋晩期以来の拠点集落として平沢同明を評価する。同明は赤焼遠賀川だけが著名になってしまったが、中里を理解する鍵がいっぱい詰まっていることを言外に匂わせてくれた。③は中里について、刊行間近な正式報告の考察の一端をいち早く披歴して下さったもの。中里と同じような遺跡がどれだけ存在したのか、その見積もりが南関東・中期後葉宮ノ台期の展開をどう評価するのかに直結する。刊行後、議論が活発化するのは確かである。④は三浦半島についてである。ここは気候が温暖で、どこからでも海が近い。海は生業の場であり、遠隔地との交易に直結することを、前者＝海蝕洞窟、後者＝拠点集落（赤坂・池子周辺）を例に示していただいた。半島は島に似て、特効薬なしでは扶養人口の上限がある。このような限定された地域で抽出される集団の規模は、他地域を見るときのスケールとなりうる。高原・高原北の発見は大きかったが、高地性で環濠をもつ地蔵山の詳細が判明すれば、半島史に一層の彩が書き加えられることだろう。⑤は産地が限定される黒曜石の流通経路について時期的変遷を考察した上で、そこに他の製品がどのように乗って流れるかを提示したものであるが、基本的に縄紋ネットワークは引き継がれるという主張である。経路には太い細いや、廃道・新規開削が間断なく行われていたであろうし、今後の課題はその理由の解明にあるといつてよいだろう。⑥西の人から見ると関東の台地上に位置する集落は高地性集落に思えるらしい。報告者はこれまで不明確であった低地遺跡の可能性や畑作など、農耕集落の解明に努めてきた。ここでは低地と台地上の遺跡に、個々で完結するものと連動するものがあることを示された。谷水田の再検討や狭い範囲内



発表者の方々 谷口 肇氏・河合英夫氏・中村 勉氏・杉山浩平氏・浜田晋介氏・立花 実氏・中川二実氏・安藤広道氏(左から発表順)

での移住集団と集落との関係把握などを通じて遺跡群の動態解明を志向している。⑦相模では中期宮ノ台式と後期土器との断絶の解釈が永年の課題であったが、後期土器の成立に東三河～西遠江からの集団移住による影響が大きいことを明示した。また、相模川以西の広範囲から微量出土する櫛描紋土器を手掛かりに、朝光寺原式研究以外では等閑視されざりだした甲斐を経由した中部高地とのつながりに改めて光を当てた。鉄剣や鉄釧・銅釧、ガラス玉など畿内中枢には希薄な遺物が、北近畿・北陸・信越・群馬という地域で卓越することを「おまけ」のように語ったが、その伏線としての甲斐である。この報告の主題は、後期のネットワーク復元である。⑧は大阪が舞台となる。識別が容易な土器胎土を手掛かりに、土器製作・使用集団の規模と自給率の変化を考察する。弥生研究の本場は西日本で、土器研究の先進地は近畿と思う向きも多いかもしれないが、大阪における編年上の弱点は相模と同じく中期末から後期初頭にある。その中で生駒のチョコレートは土器の移動を語る強力な武器である。こちらでは中期中葉の金雲母や古墳前期の海綿状骨針など一部に特徴的な夾雑物は認められるが、有効に機能していない。集落毎に違う顔つきの土器が特徴的な当地にあつては、まず視覚触覚の感性を高めて製作地を特定し、それを説明できる方法を考えることであろう。これはとても難しい。⑨は一つの台地上に展開した遺跡群の再評価を含めた調査記録であ

る。報告者は地道な調査を丁寧に繰り返しているが、それは多摩川下流域の遺跡群の動態追求という目的につながる。研究の次元には階層があるが、現地調査、地域・列島研究といった空間的なものだけでなく、社会構造やひいては心の問題にまで広がるものであろう。報告者がどの高みにまで目配せしているか、不明を恥じるばかりであるが、ここでは凡夫にも理解可能なレベルを提示してくれた。つまり、地域社会の安定とそこから創出される社会的富があり、それが古墳時代へ向けてどのように作用するのかといった視点である。

神奈川におけるここ四半世紀の弥生研究で二大事件は神崎（後期前葉）と中里の調査であることを強調しておきたい。とりわけ中里は繰り返しになるが、③で言及されたように、南関東における最も弥生らしい中期中葉がどのように花開いたのかを考える上で極めて重要な遺跡である。その前段階を取り上げた②や、限定された地域での中期中葉から後葉への遺跡分布も取り上げた④、集落立地に論及した⑥も中里を意識せざるを得ないものである。神崎は東三河・西遠江からの移住者のムラとして著名だが、⑦はそのメカニズムを見据えたものである。

浅読み裏読み斜め読み、誤解曲解、勘違いに愚言をとりまぜて振り返りましたが、神奈川を前面に押し出した大変欲張りな企画で素晴らしい一日を創って下さった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。次回も楽しみです。

2008 年度 総会開催日程のお知らせ

2008 年度総会の日時と会場が決まりましたのでお知らせいたします。多くの方のご出席をお待ちしております。

日時：2008 年 5 月 10 日（土）13 時から

会場：神奈川県埋蔵文化財センター 3 階研修室（横浜市営地下鉄 阪東橋駅下車徒歩 10 分）

同時開催イベント：考古学トピックス 2007（横須賀市：古代瓦窯、横浜市：近代遺跡についてなど）

ホームページその後の様子について

ホームページ「考古かながわ」はその後順調に訪問者数を増し、現在 3800 件あまりに達しています。今後も随時内容を更新して参りますので、ときどき覗いてみてくださいませ。 <http://www.koukokanagawa.net>

また、メーリングリスト **Kokokana** は登録された会員間のコミュニケーションの場でもあります。たとえば、参加した行事の感想や意見を述べてみたり、見学したい史跡を提案してみるなど、活用と参加の方法は色々ありそうです。是非登録していただき、積極参加をお願いいたします ※自主登録はこちらから <http://www.koukokanagawa.net/kitei.html#ml>

紹介！公開された古墳の石室（..）

2007年11月に、寒川町岡田に所在する大（応）神塚周辺古墳の横穴式石室が見事に復元され、一般に公開されました。この古墳は、1月に開催した第31回神奈川県遺跡調査・研究発表会においても、「岡田西河内遺跡－岡田古墳群の調査－」として、その調査成果の概要についてが紙上発表されたものです（小林2008）。

大（応）神塚周辺古墳は岡田に所在する前方後円墳、「大（応）神塚」の周辺に分布する円墳群のひとつで、寒川駅北口地区の区画整理事業に先立って発掘調査が実施されました。墳丘の盛土は太平洋戦争後の削平のため残っておらず、調査では埋葬主体部となる横穴式石室と墳丘の周囲をめぐる周溝が発見されました。石室も戦中・戦後の混乱のさなか、側壁の一部と奥壁・天井の石が取り外され、残っていませんでした。周溝は幅3.0～4.5m、深さ1.2～1.6mの規模をもち、この内側で直径20～22mの大きさを測りました。



大（応）神塚周辺古墳の横穴式石室

横穴式石室は墳丘中央部の地山を掘り込み、この中に凝灰岩の切り石を積み上げて構築されていました。掘り込み（掘り方）と石積みの間は黒土と赤土を交互に突き固めながら埋められており、石積みが動かないように補強工事（裏込め）のなされていた様子が見て取れました。遺骸を安置する玄室とそこに向かう羨道が残存しており、南東側に入り口をもつことが分かりました。石室の規模は全長8.0m、玄室の長さ3.4m、幅は奥壁近くで1.6mを測ります。高さは1.1mまで残っていました。

石室内部からは、紺色のガラス小玉1点、鉄鏃1点、人の歯の一部が発見され、周溝の中からは須恵器の甕・平瓶・短頸壺が出土しています。なお、この古墳は明治41年（1908）に寒川神社より依頼を受けた東京帝国大学教授の坪井正五郎博士によって「大（応）神塚」とともに発掘調査され、その際に金銅製の耳環、瑪瑙製の勾玉、水晶製の切子玉、石製の



横穴式石室完成記念説明会的一幕（手前中央が復元展示物）

管玉、ガラス小玉、鉄製の直刀、鉄鏃などが出土しています。これらは現在、寒川神社で保管されています。これら出土品の様相をもとに、古墳が築造されたのは6世紀末～7世紀の初め頃と推定されています。

寒川町ではこの貴重な凝灰岩の切り石積みの横穴式石室を活用するため、発掘調査現場において石室の型取りを行い、復元したものを一般に公開しています。現在、石室の復元展示物は寒川町文化財学習センターで展示されています。是非、一度お出かけください。

中川真人（連絡誌担当役員）

【寒川町文化財学習センターのご案内】

入館料 無料

開館日 毎週火・水・金曜日、第4土曜日

開館時間 午前9時～午後4時

住所 寒川町一之宮7-3-1

（寒川町立一之宮小学校内）

電話番号 0467-75-1930

問合せ先 寒川町教育委員会生涯学習課

0467-74-1111



考古かながわ 第39号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2008年3月28日
編集 秋田かな子・中川真人・野口浩史（連絡誌担当）
印刷 （有）湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之
〒252-8520 藤沢市遠藤5322
慶應大学 岡本孝之研究室 気付
郵便振替 00240-9-71208
e-mail soumu@koukoKanagawa.net
URL http://www.KoukoKanagawa.net